

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 弘前大学教職大学院主催 青森県教育委員会共催
コラボ研修プログラム	事業名：NITS・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業
支援事業報告書	研修等名： 【NITS・弘前大学教職大学院コラボ研修】 令和5年度充実期研修講座「組織で解決する力を伸ばす－チーム学校を支えるスクールリーダーのために」 開催日時： 4月：ガイダンス及び最新の教育事情に関わる講義を配信（オンデマンド） 各自勤務校で、NITS 研修動画シリーズの「学校組織マネジメント」の回を視聴、ワークを実施 5月11日(木)15:00～16:00 受講生顔合わせ（オンライン） 5月16日(火)・18日(木)・23日(火)【選択】：第1回協議（オンライン） 6月13日(火)・22日(木)・29日(木)【選択】：第2回協議（オンライン） 7月27日(木)：第1回集合研修（於：弘前大学） 8月7日(月)・7日(月)・17日(木)・18日(金)【オプション・選択】：昨年度受講者の実践事例を踏まえたコンサルテーション（オンライン） 9月5日(火)・12日(火)・20日(水)・21日(木)・10月4日(水)・10日(火)・12日(木)・17日(火)【選択】：教職大学院教員によるコンサルテーション（オンライン） 希望日程で1～2回参加 11月23日(木)：第2回集合研修（於：弘前大学） 開催場所： 弘前大学（青森県弘前市文京町1番地）及びオンライン 参加人数（総数）と参加者の属性： 30代後半～40代の県内公立学校教員（教諭・養護教諭等）で所属校校長の推薦する者24名（小学校6人、中学校3人、高校11人、特別支援学校4人）が継続参加、実践事例コンサルテーションには教職大学院生8人も参加

#### 内容：

青森県の育成指標の充実期教員に求められる「マネジメント力」「指導力」の伸長を目的とする講座。4月～11月の長期にわたる研修で、教職大学院教員のコンサルテーションを受けながら、実際に勤務校の改善に資するアクション・プランを立案、実施する。

1. ガイダンスと講義（オンデマンド）：ガイダンスおよび、「令和の日本型学校教育と Learning Compass 2030」と題して、近年の国内外の動向に関する講義を行った。
2. オンライン協議（5・6月）：本講座参加者に事前に NITS 研修動画シリーズを見てもらい、その内容を踏まえて自身の勤務校の実態に関する意見交換を行った。
3. 第1回集合研修（7月）：「子どもの家庭の背景と外部連携」「組織の協働とリーダーシップを考える」の講義に加えて、講座参加者が自身のアクション・プランの草案を持ち寄り、相互検討を行った。
4. オンライン実践事例コンサルテーション（8月）：昨年度の講座参加者の実践報告とその内容に関する協議、今年度参加者の進捗状況の共有を行った（自由参加）。
5. オンラインコンサルテーション（9・10月）：講座参加者のアクション・プランの進捗状況の共有と、共同のブラッシュアップを行った（複数日程を提示し選択、希望により1回または2回）。
6. 講義（オンデマンド）：「インクルーシブ教育システムにおけるマネジメント」に関する理論と実践の講義。
7. 第2回集合研修（11月）：実際にアクション・プランを実施して省察した内容を報告してもらい相互検討を行った。

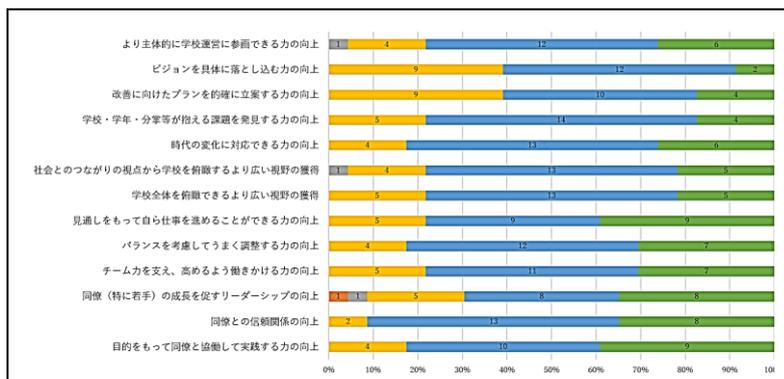
アクション・プラン例：「観点別評価の教科間の情報共有」「私服登下校 week の試験的運用」  
「研修の ICT 化による授業改善と働き方改革」

講座プログラムの開発は、県教育庁学校教育課・教職員課・県総合学校教育センターの指導主事と教職大学院教員で構成されるミドルリーダー養成委員会が中心となって、県内の教育関係者（中核市教育委員会・校長会等）にヒアリングを踏まえて進められた。作成されたプログラムは、青森県教員等資質向上推進協議会に提案して了承を得た上で、令和3年度に試行、令和4年度より本格実施。令和5年度は、コンサルテシ

ンの機会をさらに充実させた。令和5年度からは、正式に青森県教職員等研修計画に位置付けられている。

## 成果：

参加者による自らの資質・能力に関する自己評価は次のグラフの通りである。事前と事後の「職仕事への意識」の変化は、「私は、他の教員への助言・支援等の指導的役割を果たすことができる」「私は、校務分掌等の組織運営における中心的な役割に関して、どのように取り組めばよいかイメージを持っている」など肯定的な10項目で統計的に優位な水準で上昇が見られた。また、「私は、他の教員への助言・支援等の指導的役割を担うことに対して漠然とした不安がある」「仕事に追われて押しつぶされそうな気持ちになる」の不安に関する2項目で統計的に有意な低下が確認された。勤務校の校長に対するアンケートにおいて、「勤務校の教育活動にプラスの効果があった」という項目は100%「あり」という回答であった。



## 参加者の声

・色々な校種、教科の先生方と関わってつながりができましたし、視野が広がりました。今後もアンテナを張りながら新しいことを取り入れていきたいです。また、自分自身ミドルリーダーとして自覚、覚悟を持って取り組んでいきたいです。教職大学院の先生方にはお世話になりました。ありがとうございました。

・本研修への参加をとおし、漠然と「この学校がもっとこうだったら良いのに」と思うだけであったものが、「ならばこういうことをしてみてもどうか」、「生徒にこういうこともさせてみたら生徒がもっと学校生活に意欲的に励んでいけるのでは」と具体的な方法や方向性をイメージする機会が増えた。これまで他人事として進むがままに学校運営を捉えていた自分が、自分自身も学校運営への参画者の一人である、という自覚を持つきっかけとなったことはこの研修に参加して得たものの中でも、特に意義深い経験となったと考える。

・初めは不安もありましたが、教職大学院の先生方の温かいご助言や、研修での他教員との情報共有のおかげで、何とかアクション・プランを実行することができました。自分自身の自信につながりましたし、新しいことに取り組む力が身についたように感じ、今はとても充実した気持ちを味わっております。大変勉強になりました！この気持ちを今後の仕事に生かして頑張ろうと思います。どうもありがとうございました。

## アイデアや工夫したこと：

- ②参加者自身が、自らの勤務校の状況を分析し、アクション・プランを考え、周囲と対話しながら実践する。
- ③その過程を、協働的な省察や教職大学院教員のコンサルテーションによって支援する。
- ④校種を混合することにより、自らの実践現場を相対化し、俯瞰的に見る力を養う。
- ⑤Off-JTとOJTを効果的に関連させ、オンラインを多用し、集合研修を2日に抑える。

## <写真・図など>

